

聖書：マタイ 25：14～30

説教題：タラントのたとえ

日時：2020年6月28日（朝拝）

マタイの福音書 25 章に記されている 3 つのたとえ話の中の 2 つ目、いわゆる「タラントのたとえ」を今日は見て行きます。最初の 14 節に「天の御国は、旅に出るにあたり、自分のしもべたちを呼んで財産を預ける人のようです」と記され、この主人がしもべたちに、それぞれの能力に応じて、5 タラント、2 タラント、また 1 タラントを渡したと書かれています。この「タラント」という言葉には印がついていて、欄外の 15 を見ると「一タラントは 6000 デナリに相当。一デナリは当時一日分の労賃に相当」と注釈されています。今日の一日の労賃を（少し高いかもしれませんが）計算しやすいように 1 万円とすると、1 タラントは 6000 万円になります。あるいは 1 年は 365 日ですが、働く日は 300 日とすると、1 タラントは 6000 日分の労賃ですから 20 年間分の給料となります。ですからこれは大変な額であることが分かります。5 タラントの人は 100 年分、2 タラントの人は 40 年分、1 タラントの人でも 20 年分の給料です。主人はこの金額をしもべたちに預けた後、旅に出ました。そして 19 節にある通り、「かなり時がたってから」帰って来ます。そしてしもべたち一人一人と清算をしたというのが今日の話です。これはこれまで見て来た通り、世の終わりの日すなわちイエス・キリストの再臨の日に備えて生きるという一連のメッセージの中で語られています。そのことを念頭に置きつつ、この箇所を読むことが大切であると思います。

さてこのたとえから私たちが学ぶ基本的なことは何でしょうか。それは神は私たち一人一人にタラント、すなわち賜物を与えておられるということです。芸能人を指す言葉に「タレント」という言葉がありますが、あの言葉はこの「タラント」をもとにした言葉です。しかし聖書が述べていることは、神はごく一部の人々だけでなく、すべての人に何らかのタラントを与えておられるということです。その人その人によって与えられているタラントに違いはあります。ある人には 5 タラント、ある人には 2 タラント、ある人には 1 タラントが与えられています。これは神の深いお考えによることです。そして私たちがこの際、考慮に入れて良いことは、1 タラントであっても、先に見たように、それは相当に大きな額であるということです。ですからある人に比べて自分のタラントは少ないとしても、それでも神は豊かに与えてくださっているとと言えます。具体的にこのタラントは何を指すのでしょうか。ここではお金として表現されていますが、その通り

にお金や財産も含むでしょうし、またその人に与えられている特別な能力や才能も含むでしょうし、その他、その人が受けた教育や知識、健康や体力、社会的地位や信用、様々な環境やそこで得た経験、また人間関係、色々な機会など、あらゆる良きことが含まれます。そして大事なことは、これらはすべて神が与えてくださったものであるということです。いやもう少し注意して読んでみると、今日の箇所でもべたちはこれらのタラントを預かっただけであると言われていています。たとえば 16 節に 5 タラント「預かった者は」とあります。ですからそのタラントは究極的に言えば、その人のものではない。それは一時的に神からお預かりしたものに過ぎないのです。ですからそれを正しく用いたか、活用したか、やがての日に問われることとなります。私たちは自分に与えられている賜物、タラントをまずそのように考えなくてはなりません。私たちは神に感謝して楽しんでそれらを用いて良いのですが、何よりもそれを預けてくださった神に喜ばれるように用いる必要があるのです。それをどう使ったかについて、やがての日に私たちには報告義務があるのです。そのやがての日について今日のたとえは特に焦点が当てられています。順番に 3 人の人について見て行きたいと思います。

一人目は 5 タラントを預かった人です。彼についてまず注目すべきは、見落としがちな 15 節最後の言葉です。主人はしもべたちに、それぞれタラントを渡して旅に出しましたが、「するとすぐに、5 タラント預かった者は出て行って」と記されています。つまりこの人はさっそく仕事に取りかかったわけです。主人が出かけた後、しばらくは帰って来ないだろうと言って、まず怠ける生活を始めたのではなかった。また 5 タラントも預けられたが、さてどうしよう、あまり気が進まないなあと嫌々ながら、仕事を始めたのでもなかった。「するとすぐに！」と書かれています。つまり彼は進んで仕事に着手したのです。簡単に言えば彼にはやる気があります。この彼の姿を心に留めておきたいと思います。

彼はそれで商売して、他に 5 タラントを儲けました。元本を 2 倍に増やしました。この 5 タラントは、19 節で「かなり時がたってから」主人が帰って来て清算した時に報告した額と同じですから、相当の時間をかけて得たものと考えられます。彼は主人に報告します。20 節：「ご主人様。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください、私はほかに五タラントをもうけました。」これを聞いて主人は彼を心から褒めます。「よくやった。良い忠実なしもべだ。」そして彼に二つの報いを与えます。一つは「おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう」。先に見た通り、1 タラント

は20年分の給料に相当しますから、5タラント渡された彼は100年分の給料を預けられていました。ところが主人はそれを「わずかな物」と言います。それはこのあと彼に与えられる物に比べれば、ということでしょう。ここから私たちがこの世で与えられたものを神に喜ばれるように用いるなら、やがての天の御国ではとてつもない報いを受けることになるということを教えられます。たとえこの世で私たちがどんなに多くの物を手にしていても、それは神がやがて与えてくださるものに比べれば「わずかな物」「小さな物」に過ぎません。それはやがて大きなものを任されるためのテストケースとして、今一時的に私たちの手に委ねられているだけなのです。その小さなものを忠実に用いる時、比較にならない何と大きな祝福が天で私たちを待っているか！ということ私たちが思われます。もう一つの報いは「主人の喜びをともに喜んでくれ」ということです。ここに示されていますように、主人はしもべをただお金を稼ぐための道具としか見ていないのではなく、彼をご自身の喜びを分かち合う交わりへと招いています。そして主人の心に満ちている喜びは何かと言えば、それは何と言ってもこのしもべを喜ぶ喜びでしょう。主人はこのしもべを心から喜んでおり、その私の喜びをあなたはともにするようにと招いています。私たちがこのしもべのように歩む時、このように私たちを喜んでくださるイエス様の大きな喜びの中に生きようよと招かれるのです。

次に見る2人目の人は2タラントを預かった人です。彼について17節に「同じように、2タラント預かった者も」と記されていますから、彼も5タラントの人と同じように、主人が出かけると「すぐに」働きに取りかかったようです。彼も相当の時間をかけて2タラントを儲け、元本を2倍にしました。注目すべきは主人に自分の働きを報告した際、主人から返って来た言葉は5タラントの人に対する言葉と同じだったということです。21節に記されている5タラントを儲けた人に対する主人の言葉と、23節に記されている2タラントを儲けた人に対する主人の言葉は全く同じです。5タラント稼いだ人より額が少ないからと言って、称賛の言葉が少なかったということはありません。私たちはここから、他の人と自分を比較する必要はないのだと教えられます。私たちは賜物を多く持っている人を羨む必要はなく、自分は自分に与えられている賜物に従って一生懸命やれば良いのです。そうすればたとえ目に見える成果がある人より少なくても、それで主の評価が下がるということはないのです。主はそれぞれに与えた賜物に従って評価してくださるのです。

さて雰囲気ガラッと変わるのは3人目の1タラントを預かっていた人の場合です。

彼について 18 節に「一方、一タラント預かった者は出て行って地面に穴を掘り、主人の金を隠した」と記されていました。その彼が主人と清算をするために 24 節でやって来ます。最初の「ご主人様」という呼びかけまでは先の二人と同じです。しかしその後が続くのは、一体これはどうしたことかと思われるような言葉です。彼は主人に向かって「あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集める、厳しい方だと分かっていました」と非難めいた言葉を口にします。麦を収穫するためには種を蒔く必要もありますし、脱穀のためには打った穂を空中に放り投げ、いわば散らして、もみ殻を吹き飛ばす作業が必要です。そうした作業を自分はずせずに、ただ収穫だけを求めるひどい方だと言っています。そして彼は続けます。25 節：「それで私は怖くなり、出て行って、あなた様の一タラントを地の中に隠しておきました。ご覧ください、これがあなた様の物です。」 このしもべは、主人は厳しい方だから、もし元本を減らしたりしたものなら大変なことになる。だから私は恐れて、これを地面の下に隠したと言っています。ここには先の二人のしもべには見られなかつた主人に対する反感が見て取れます。先の二人は、主人が旅に出た後、すぐに預けられたタラントを活用する働きへと出て行きました。そこには主人に対する愛や信頼、また感謝が現れていました。それに対してこちらの 3 人目の人には、そのようなものがさっぱり見られません。彼は主人に対する不満や怒りの感情は持っていますが、主人への愛の心は持っていませんでした。ですからそんな主人のために働く気もない。むしろ下手なことをして 1 タラントを減らして怒られるよりはまだましと考えて、そのタラントを活用せず、地面の下に隠しておいたのです。

そんな彼を主人はこう評価します。「悪い、怠け者のしもべだ」と。そして言います。もし私が蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集める者だとするならば、おまえは私の金を銀行に預けておくべきだったと。これは先ほどのしもべの言葉に同意した言葉ではありません。あくまで彼の主張に沿って話を進めただけです。そして彼のその主張が一貫していないことを示しているのです。もし私がおまえの言うように、厳しく取り立てる人間だと本当に思うならば、せめてその 1 タラントを銀行に預けて幾らかの利益を出そうとしたはずではないかと。しかしそれさえもしないということは、言い訳だけは立派にしてみせるけれども、実際は何もやる気がない「悪い、怠け者」なのである、と。そしてこれによってこのしもべには主人への愛が少しもないこと、むしろその心には主人への反感、反抗心が満ちていることが明らかにされたということなのです。

そこで主人は 28 節で「だから、そのタラントを彼から取り上げて、十タラント持っている者に与えよ」と言います。活用するために預けているのに、それを活用しないなら、それは活用する人に与えられるということです。そして 29 節で「だれでも持っている者は与えられてもっと豊かになり、持っていない者は持っている物までも取り上げられるのだ」と言われます。これについては後で少しコメントします。そして最後 30 節で「この役に立たないしもべは外の暗闇に追い出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ。」とされています。ここから分かることは、これは一時的な罰を受けたしもべの話ではなく、天の御国に入れてもらえないしもべの話であるということです。つまり彼はこれによって自らが神の民でないことを明らかにしたということだったのです。

さて以上のたとえから私たちはどんなメッセージを受け取るべきでしょうか。最初に述べましたように、ここに言われている基本的なことは、私たちはみな神から何らかの賜物、タラントを受けているということです。それは神のために用いるべきタラントです。そして「タラント」が意味する金額を考えれば、それはたくさんのものであることが暗示されています。もし私たちがこのタラントを用いないならどうなるでしょう。それは 29 節で言われているように、私たちから取り上げられることとなります。「取り上げられる」は受身形で記されていて、取り上げる方は神ご自身であることが暗示されています。私たちが賜物を用いないでいると、私たちはそのことによって、それを失うのです。その気さえ起こせば私はいつでもこの能力を発揮できると思っていても、いざ使おうとする時に、その力がない自分に直面するのです。またそういう機会も与えられない。その人はこのようにして「取り上げられる」とう真理をこの世においてある意味で経験し、そしてやがての日に決定的に知るのです。そしてそれだけならまだしも、それが自らが神の民でないことの証明にさえなってしまうかもしれない。神が与えてくださったものを神のために使う気持ちもないし、気力もないし。愛もない、御国の外に追い出されるべき者として。

ですから私たちはこのたとえを通して、与えられているものを積極的に神のために用いるしもべの歩みへ導かれないと思いません。主はここでやがての再臨の日を見据える歩みについて語っておられますが、私たちは再臨の日まで何もすることがなく、ただ待っているしかないのではないのです。神はその日まで私たちがすべきことを与えてくださっています。そしてそのために多くのタラントを与えてくださっています。そのタラン

トを良く用いて、主の再臨の日まで、主の御国のために神とともに働き、また仕えるようにと私たち一人一人を招いてくださっています。私たちの人生にはこのような意義が与えられているのです。その際、他の人との比較は無用です。私たちは5タラントなくても良いのです。2タラントでいいのです。いや1タラントでも良いのです。その半分でもいい。大切なことは神が与えてくださっているタラントを十二分に活用することです。一人目や二人目の人のように、私たちの主人への愛によって、それを一生懸命用いることです。そのようにする時、29節にある通り、その人はさらに豊かに与えられることとなります。神がそのタラントを増し加え、さらに用いてくださいます。そしてかの日にその人に言ってくださいます。「よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だった」と。再臨の日に、このように主に言っていただいて天の御国に迎え入れていただけることにまさる幸いはあるでしょうか。私たちは今日の御言葉の光の下で改めて自分の人生を考え直したいと思います。タラントを地面の下に穴を掘って隠し、日々を無益に過ごすのではなく、与えられているものを積極的に主のために活用する歩みへ導かれたいと思います。その生き方に主への言い尽くせない感謝と愛を告白しつつ、かの日には主からの称賛のお言葉を頂いて御国に入る者とされるという、何にも勝って価値のある幸いな人生へ導かれたいと思います。